



住民の知恵と努力のまちづくり

犬上川いぬがみの水の恵みで奈良時代から農耕を営み、米どころとして栄えてきた滋賀県犬上郡甲良町。『せせらぎ遊園のまち』と呼ばれるこの町の『せせらぎ』は、20年に及ぶ住民主体のまちづくりの努力で守られてきた。その経験は国際協力にも生かされ、JICAの研修員に多くの知恵を与えている。



甲良町での研修を踏まえ、自国で取り組みたいことを発表するビモルさん。まちづくり委員会や地域学習、図書館、無駄のない水の使い方などが特に参考になったという

「人権尊重」「住民主体」のまちづくり

「言葉や文化が違ってても、住民の幸せな暮らしを求めるのはどの町も同じ。自分たちで自分たちの町をつくる。その取り組みを支えている力を、今回の研修で感じてほしい」

2008年4月、甲良町役場の山田禎夫さんの講義に、2人のバングラデシュ人が耳を傾けている。彼らは、バングラデシュでJICAが実施中の住民参加型農村開発プロジェクトのディレクター、カーン・ナジブラさんと農村開発行政官のダス・ヒモル・チャンドラさん。日本の地域開発における行政と住民自治組織の取り組みを学ぶために来日した。人口約8060人、13集落からなる甲良町。どの集落にも、農業用水を活用した緑と花があふれる親水公園や水路があり、人々の心を潤している。このせせらぎの絶えない美しい住環境を築いてきた「せせらぎ遊園のまちづくり」の2つの柱が、「人権尊重」と「住民主体」だ。それはどのように形成されてきたのか。

山田さんはまず、同和地区人口約50%というこの町の部落解放運動の役割を挙げる。

「23年前、閉鎖的で財政も危機的状況にあった町政を変えようと、町長選に出馬した部落解放同盟の支部長が町長。住民主体の行政運営へと転換を図り、互いを認め、支え合う人権尊重のまちづくりを推進してきた」

もう一つの転機が1980年代の圃場整備計画だ。それには農業用水の送水を地下パイプライン化し、これまでの集落内水路に水を流さないといった計画が含まれ、景観の悪化など「甲良らしさ」が失われることへの危機感を募らせた住民の間で、集落の将来は自分たちで考えようという意識が高まり、各集落は「むら

づくり委員会」を組織した。行政もむらづくりの人材を育成するために、大学教授などの専門家を招いて地域学習の機会を設置。その中で、住民は自分たちの集落を見直し、生活環境を総合的に改善する計画を立て、行政の支援のもとに実現させていった。山田さんは「住民主体のまちづくりとは、住民と行政が共に悩み、知恵を出し合う地域学習と実践のプロセスだ」と強調する。

山田さんの講義や山崎義勝町長の経験談を聞き、実際に集落を見て歩いた研修員は、甲良と比較しつつ自国の課題を整理した上で、むらづくり委員会の代表らと議論し、プロジェクトで取り組むべき活動を考えた。研修員が特に関心を示したのが、いかに住民の合意を得て計画をつく

り実施していったかと、その中で果たした行政の役割。計画も予算も中央政府のトップダウンで決められる自国の現状を、ボトムアップに変えていく術を模索しているようだった。山崎町長は「20年前の日本もそうだった。国に言われた通りにやるしかない中で、私たちは、こうできなかった。国に言われた通りにやるしかないなとまちづくりのビジョンを描いていた。そういう“夢”を持つことと、実現するために自由な発想と柔軟な思考で自分たちから変わる努力をすることが重要」と伝えた。

もう一つ、研修員が感銘を受けたのが、築75年の小学校校舎が図書館として保存され、文化の発信地の機能を果たしていること。研修を総括する安藤和雄・京都大学准教授は、「バングラデシュの農村開発は経済発展を重視しがちだが、文化や環境などの視点を含め総合的に考えることの重要性を甲良から学んでほしい」と話す。その思いは2人にも届き、「経済発展だけでなく、人材育成や文化を大切にして開発を考えることが大事だ」と話し、地域学習や図書室などを導入する意欲を見せた。

国際協力をまちづくりに生かす

甲良町には、住民主体のまちづく

りの経験を学ぼうと、国内外から多くの視察者が訪れる。JICAの研修も、02年のタイ²を皮切りに、主体的に受け入れ、まちづくりに活用している。例えば、研修員の意見から新たな気付きを得てまちづくりの切り口としたり、少額でも受け入れ資金をまちづくりの活動に生かしたり。また「まちづくりを継続させるにはエネルギーが必要。研修員との交流は大きな刺激になり、住民がその記憶を共有することで地域のきずなも深まる」(山田さん)。

山崎町長は「一度できた関係を継続し、ネットワークを広げていくことが大事」と言う。今回の研修で生まれたバングラデシュとのきずなもまた、甲良のまちづくりの「糧」になるのだらう。

2 JICAが2001～04年にタイで実施した「基礎自治体開発計画策定能力プロジェクト」では、甲良町のまちづくりがモデルとされ、タイの自治体関係者の研修を受け入れたほか、山田さんが短期専門家として現地に派遣された。プロジェクト終了後も、集落の一つが現地で交流協定を結び、交流を続けている。また、4月からタイ人女性が国際交流企画員として町役場に配置され、国際交流の活性化に努めている。



町指定文化財である図書館の建物は、1933年に建てられた総檜造りの旧小学校校舎。新校舎建設に伴い、住民の要望で92年に歴史資料館として保存され、99年から図書館に、「学び舎」と呼ばれ、人権やまちづくりの図書のほか、児童図書も充実している



研修員たちは、集落を歩いて水路や公園、ごみの分別収集所などを視察した。各集落のむらづくり委員会を中心に、住民が自然に配慮した水環境や景観の整備・維持管理を行っている